

(別紙様式3)

平成31年3月29日

## 研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 静岡県静岡市葵区追手町9番6号  
管理機関名 静岡県教育委員会  
代表者名 教育長 木苗 直秀 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

平成30年4月2日（契約締結日）～平成31年3月29日

#### 2 指定校名

学校名 静岡県立三島北高等学校

学校長名 齊藤 浩幸

#### 3 研究開発名

→「国際的な視野から地域課題を解決できるグローバルな人材の育成」

#### 4 研究開発概要

世界的な課題である「安全な水の確保」をテーマにした課題研究を通じ、大学・企業・行政・NPO法人・国際機関・海外学校等との連携の下、コミュニケーション能力、発信力、問題解決力、課題設定力、行動力など、グローバルな課題に対応できる能力を育成するための、全生徒を対象としたプログラムを開発する。課題研究では、プロブレム・ベースト・ラーニングやフィールドワーク等、生徒の主体的で対話的な学びを促す方策を取り入れ、グローバルな視点を持って社会に貢献できる実践力を培う。また、静岡県グローバル人材育成事業や静岡県総合教育センター等との連携を図り、開発したプログラムの普及に向けた取組を実施する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ア 授業支援 (ALT派遣)	←											→
イ 運営指導委員会				○							○	

(2) 実績の説明

ア 授業支援 (ALT派遣)

(ア) 学校設定科目GWI支援

日 程 平成30年4月～平成31年2月

支援者 県庁PA

内 容 個人英語レポート・英文レジュメ・英語ポスター作成及び英語プレゼンテーション指導

対 象 2年生生徒全員 (284人)

(イ) 英語表現II支援

日 程 平成30年4月～7月

支援者 県庁PA

内 容 個人英語レポート評価補助

対 象 3年生生徒全員 (287人)

イ 運営指導委員会の開催

(ア) 第1回SGH運営指導委員会

日 時 平成30年7月4日(水) 午後2時10分～4時

場 所 県立三島北高等学校会議室

出席者 委員長、副委員長、委員5人、校長、副校長、教頭、SGH推進室職員  
オブザーバー4人

内 容 ・平成30年度事業計画  
・静岡県版グローバルハイスクールの取組について

(イ) 第2回SGH運営指導委員会

日 時 平成31年2月1日(金) 午後2時50分～4時40分

場 所 三島商工会議所

出席者 委員長、委員4人、校長、副校長、教頭、SGH推進室職員  
オブザーバー1人

内 容 ・今年度の振り返り(質疑応答・協議)  
・次年度に向けて

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（平成30年4月2日～平成31年3月29日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
SGH推進委員 委嘱		○←										→
学校設定教科	←											→
国内フィールドワーク					○							
課題研究成果発表				○	○	○	○	○	○		○	○
海外研修	事前研修				○		○	事後研修				
事業成果普及活動	←			○							○	→
教員研修	←											→
生徒評価改善	←											→

(2) 実績の説明

ア S G H推進委員の委嘱及び諮問

水ジャーナリストの橋本淳司氏に S G H推進委員を委嘱し、事業計画、事業評価及び事業の円滑な実施に関する諸項目について諮問した。また、授業支援を仰いだ。

イ 課題研究

(ア) 学校設定科目 L W I、G W I の実施

・シラバスの見直し

プレゼンテーション作成の流れや発表のタイミングを見直し、改善した。

・大学生等の協力

本校を卒業し、大学生になった学校設定教科 S G H の初回履修生徒を中心に、支援を依頼した。また、外部支援者との連携を密にした。

・生徒間の技能継承機会の設定

2年生が作成した授業案による授業を1年生を対象に担当教員が行った。

・地域での活動（参照：エ(イ)）

近隣の小学校児童や中学校生徒を対象に、複数の課題研究チームが課題研究内容を授業で発表したり、作成したリーフレットやゲームを紹介したりした。また、課題研究の内容をコミュニティラジオ番組で紹介したり、地域の公園やショッピングセンターで来客を対象に説明したりしたチームもあった。

・その他

学校設定教科等の授業案や教材は汎用性のあるデータとして蓄積し、県総合教育センターホームページ等で、県内公立学校教職員に公開する。（予定）

ウ 国内における研修・フィールドワーク

(ア) 協力団体等による事業

a 雨庭実験

主 催 雨水市民の会

対 象 「雨水とグリーンインフラ」分野課題研究チーム生徒 25人程度

日 程 平成30年7月13日（金）

場 所 本校校地内「紫苑の森」

- 内 容 小規模の「雨庭」（雨水を活用した庭園）整備
- b 長泉町ニコニコ水力発電設備見学  
 主 催 静岡県駿東郡長泉町くらし環境課  
 対 象 「水とエネルギー」分野課題研究チーム生徒 41人  
 日 程 平成30年7月23日（月）午後2時～4時  
 場 所 静岡県長泉町役場（集合）、長泉町桜堤三丁目付近  
 内 容 河川を利用した小水力発電設備現場を見学
- c 狩野川台風被災現場視察ツアー  
 主 催 国土交通省沼津河川国道事務所  
 対 象 「災害対策」分野課題研究チーム生徒 25人  
 日 程 平成30年7月23日（月）  
 場 所 狩野川資料館、放水路、小坂排水機場、畑洞砂防堰堤  
 内 容 狩野川台風の歴史とその後の対策に関連する施設の見学
- (4) 生徒の自発的な計画によるもの  
 実施生徒数 191人（上記(ア)除く）  
 内 容 所属するチームの課題研究に係り、自治体担当部署での聞き取り調査、  
 近隣小中学校等でのアンケート調査等、データ収集のための実験等生  
 徒の計画により実施

## エ 課題研究成果の発表

### (ア) 学校主催事業

- a オープンスクール  
 日 程 平成30年11月17日（土）午後2時～  
 場 所 本校校舎内  
 内 容 L W I ・ G W I 課題研究のポスターセッション（日本語）  
 実施生徒 本校1・2年生全員  
 来校者 保護者、中学生とその保護者 等
- b 事業報告会  
 日 程 平成31年2月1日（金）午後1時～  
 場 所 三島商工会議所  
 内 容 L W I ・ G W I 課題研究のポスターセッション（英語）  
 実施生徒 本校1・2年生 各HR代表チーム  
 来場者 県内外教育関係者及び一般の方々

### (イ) 学校設定科目に関連する生徒の自発的な課題研究成果の発表

- a 長泉町立長泉小学校  
 日 程 平成30年12月19日（水）  
 実施生徒 1年生「水とエネルギー」分野課題研究チーム生徒 6人  
 内 容 小学校5年生児童を対象とした「ニコニコ小水力発電」の周知活動
- b イトーヨーカドー三島店  
 日 程 平成30年12月22日（土）～24日（月・祝日）  
 実施生徒 1年生「地下水」分野課題研究チーム生徒 5人  
 内 容 買い物客を対象とした「三島市の地下水減少現象」の周知活動

(ウ) 海外研修参加生徒による課題研究成果の発表

- a 三島市立北中学校  
日 程 平成30年10月15日（月）  
実施生徒 2年生海外研修参加チーム生徒 6人  
対 象 中学校3年生  
内 容 理科の授業で、生活排水に関する周知啓発授業を実施
- b 三島市北第一放課後児童クラブ  
日 程 平成31年1月21日（月）  
実施生徒 2年生海外研修参加チーム生徒 4人  
対 象 放課後児童クラブに通所する児童  
内 容 雨水を利用した家庭でもできる緑化活動について説明
- c 大阪大学国際公共政策コンファレンス  
日 程 平成30年4月21日（土）22日（日）  
実施生徒 3年生 3人  
内 容 「仮想水」に関する課題研究を発表

(エ) 外部団体からの依頼による課題研究成果の発表等

- a コミュニティラジオ番組への出演  
放送日 平成30年6月30日、9月29日、12月22日（いずれも土曜日）  
実施生徒 各回2人  
内 容 海外研修やSGH事業についてパーソナリティとの対話を通じて紹介
- b 「第23回水シンポジウム2018 in ふじのくに・沼津」での発表  
日 時 平成30年8月23日（木）  
会 場 プラサヴェルデ  
内 容 市民団体発表部門で、2年生生徒7人が昨年度の課題研究を発表
- c 「水の循環講座—すみだと世界をつなぐ水の大切な話—」第3回  
実施日 平成30年12月25日（火）  
会 場 ライオン（株）平井研究所  
主 催 墨田区、NPO法人ウォーターエイドジャパン  
内 容 一般市民を対象に、SDGsについて考える講座を担当
- d 「泉のまちカレッジ」講師  
実施日 平成31年1月12日（土）  
会 場 駿東郡清水町交流センター  
主 催 清水町教育委員会、NPO法人ウォーター・ビジョン  
内 容 1年生海外研修参加生徒が、ベトナム研修の成果について説明
- e 「水の循環講座—すみだと世界をつなぐ水の大切な話—」第7回  
実施日 平成31年2月16日（土）  
会 場 国際ファッションセンター（KFC）ホール2nd  
主 催 墨田区、NPO法人ウォーターエイドジャパン  
内 容 一般市民を対象に、生活排水とGIについて考える講座を担当

(オ) SGH校対象

- a 第4回全国SGH校生徒成果発表会（平成30年11月8日（木））  
参加者 6人

- b 2018年度SGH全国高校生フォーラム（平成30年12月15日（土））  
参加者 2人
- c 第3回関東・甲信越静地区SGH課題研究発表会（平成30年12月23日（日））  
参加部門等 英語ポスターセッション部門5チーム参加、金賞・銀賞独占  
英語プレゼンテーション部門2チーム参加
- d SGH甲子園（平成31年3月23日（土））  
参加部門等 研究成果プレゼンテーションの部 1チーム  
研究成果ポスタープレゼンテーション部門 1チーム出場

### (3) 海外研修

#### ア シンガポール修学旅行

日 程 平成30年10月7日（日）～11日（木）第1団  
平成30年10月8日（月）～12日（金）第2団

参加者 2年生280人 引率教員16人

訪問先 シンガポール大学、ジュロンウエスト中等教育学校、  
バイオポリス、ニューウォータービジターセンター

内 容 高校では、事前研修で研究した水問題やそれぞれの文化について互いに英語でプレゼンテーションを実施。ニューウォータービジターセンターでは、シンガポールの水事情に関する施設見学。

#### イ ベトナム海外研修

日 程 平成30年8月20日（月）～8月24日（金）

参加者 生徒14人（全員1年生） 引率教員2人

訪問先 ベトナム社会主義共和国 ハノイ市

内 容 チュウバンアン高校：水問題に関する相互の英語プレゼンテーション  
JETROハノイ事務所：所長によるベトナム経済事情講話聴講  
水資源大学：大学教授による講義聴講と同大学学生との質疑応答  
ドンラム村：農村体験  
ハノイ市内治水施設：河川氾濫を防ぐ治水施設建設現場の視察

#### ウ 事前・事後研修

日 程 平成30年4月～平成31年2月

対象者 ベトナム研修参加者14人、シンガポールプレゼン代表者11人 計25人

内 容 研究課題設定、研究、プレゼン練習、研修報告会、各種ポスターセッションへの参加準備

#### エ 次年度以降の取組に関する協議等

日 程 平成30年8月23日（木）

内 容 在ベトナム日本大使館の紹介を受け、ハノイ市内の中等教育学校訪問  
Skypeなどを利用したプレゼンテーションやディベートなどの実施可能性を探り、協議を行った。（引率教員担当）

### (4) 事業成果の普及に向けた活動

ア 本校SGH特設ウェブサイト更新43回（平成30年4月1日～平成31年1月31日）

イ SGHサイト提供記事42件

ウ 平成30年度事業報告会

日 時 平成31年2月1日（金）午前10時30分から午後2時40分

場 所 三島市商工会議所

参加者 県内外高等学校教員他

内 容 本年度事業・成果報告

エ 静岡県総合教育センターのホームページを利用し教材等を公開（未実施）

オ 静岡県グローバルハイスクール指定校（3校）との連携

日 程 平成30年7月4日（水）

場 所 本校会議室

内 容 第1回運営指導委員会に、各校代表がオブザーバーとして参加  
各校の事業紹介を実施

(5) 教員研修

ア 学校設定科目ファシリテーター研修

日 時 平成30年4月10日（火）

参加者 L W I 担当教員

講 師 2年生海外研修参加生徒

イ 学校設定教科振返り

日 時 毎週水曜日6・7時限

参加者 学校設定教科担当教員、海外交流アドバイザー、S G H推進委員

(6) 生徒評価の改善

ア 論理的思考力テスト

・試 行 日時 平成30年5月

方法 Classi（授業・学習支援クラウドサービス）配信

対象 1年生生徒 294人

・本校生徒 日時 平成30年9月6日（木）午前8時10分～20分

方法 マークシート式

対象 全学年生徒 855人

・他校生徒 日時 平成30年9月3日（月）～14日（金）任意の10分間

方法 マークシート式

対象 県内4校に依頼し、本校生徒と同じ問題で実施

開発にあたり、静岡大学教育学部・河崎美保准教授の指導を受ける。

イ ポートフォリオ作成

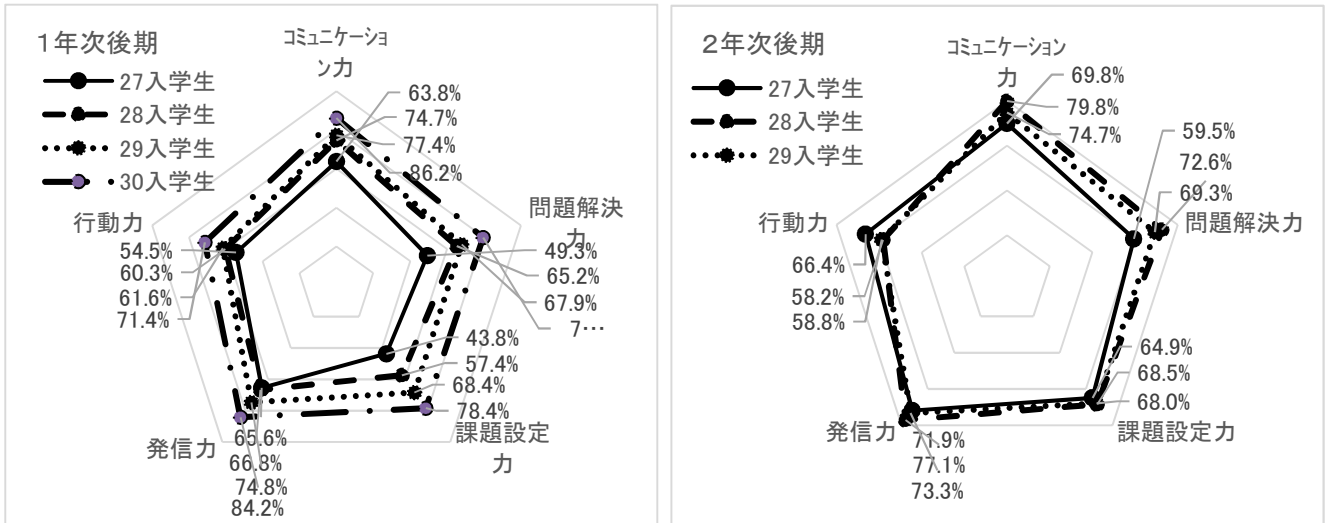
対 象 1年生生徒 294人

内 容 Classiを利用：研究内容や成果を蓄積するポートフォリオの利用を開始

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

### (1) 研究開発の成果とその効果

検証及び評価にあたっては、生徒、卒業生、教員及び保護者を対象としたアンケート及び生徒対象論理的思考力テストを実施した。生徒対象アンケートは、SGHに関するアンケート（年2回）に加え、授業振り返りアンケートを毎週実施し、成果検証にはSGHに関するアンケートを利用した。



アンケートでは、項目を「SGHでつきたい力」として設定した「コミュニケーション力」「発信力」「問題発見力」「課題解決力」「行動力」の5つにわけ、その肯定的な回答の割合をまとめ、生徒からの主に課題研究活動に関する事業への評価とした。その結果が次のレーダーグラフである。

1年次後期は、年度ごとに五角形が大きく、また形も正五角形に近づいていることから、1年次のSGH事業から生徒が感じた能力の伸びが年々増加し、カリキュラム開発はほぼ完成に近づいている。一方2年次後期のグラフは、平成28年度入学生と平成29年度入学生の五角形がほぼ等しく、また1年次後期と比較しても、割合が高くなっていることから、カリキュラムとしては相応の成果があったものの、更なる改善の可能性も感じる結果となった。

卒業生アンケートは、平成27年度入学生有志を対象に平成30年10月に実施したが、回答数が極めて少なく（卒業生287人中16人）、有意なデータを得ることができなかった。時期、方法等工夫する必要がある。

教員対象アンケートは、教員自身の変容と生徒の変容についてどう感じるかを問う内容とし、平成28年度より12月前後に年1回実施してきた。生徒の変容に関する質問では、コミュニケーション力が伸び「話し合いの場面で話をする生徒が増えた」「面接や面談で話をする生徒が増えた」といった記述が見られた。また「物事を多面的に見る姿勢」「課題を発見する力」「協調性」「社会問題への関心」の伸びを感じている教員もいた。

保護者対象アンケートからは、進路との結びつきへの不安が感じられた。事業の一層の周知と、公開性を高めることにより、生徒の伸びを実感していただくことに課題が残った。

論理的思考力テストは、平成29年度から開発を開始し、現在改良を重ねているが、学力検査との興味深い相関も見られ、大学入試改革に向けた利用方法も含め、SGH事業指定終了後も継続して開発研究していく価値のある取組であると考えられる。



## (2) 申請時目標設定に対する達成度

申請時より目標設定シートにあった成果目標のうち、「文部科学省が支援する国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合」「海外大学へ進学する生徒の人数」「SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合」は、いずれも大きくは変わらず、目標値への到達は叶わなかった。この5年間では大学入試の内容に大きな変化がなかったこと、主体的に学習する姿勢は伸びたものの、それが全生徒の学力の急激な伸長には繋がらなかったことが主な要因である。また、1年次半ばで類型選択を行い、進学を希望する学部学科を決める必然性があることから、課題研究の結果が専攻分野に影響を与える時間的余裕がなかったといえる。ただ、「大学在学中に留学または海外研修に行く卒業生の数」については、平成27年度入学生卒業直前のアンケート結果から、大学在学中の留学や海外研修を希望する生徒が多いことが読み取れたため、目標値には達成しなくとも、増加することは確実と思われる。一方、回答数からもわかる通り、全生徒の追跡調査の困難さにも直面しており、成果目標の達成が明確に報告できない問題も抱えている。

## (3) 評価

留学や海外研修に興味があっても、経済的な理由から、海外の大学への進学を誰もが実行に移せるわけではないのが現実であり、実際に進学する生徒の数はそれほど増加しなかった。しかし「自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数」は大きく伸び、社会課題への関心が大幅に高まったことも事実である。平成27年度入学生のうち7割以上の生徒は、卒業時のアンケートで、グローバル人材として必要な力が身に付いたと考えており（次ページ参照）、将来のグローバルリーダーとしての基礎力はついたものと理解する。

## <添付資料> 目標設定シート

## 8 5年間の研究開発を終えて

### (1) 教育課程の研究開発の状況について

本事業の目的である「グローバル・リーダー育成に資する教育」に係る教育課程は、課題研究を取り入れた学校設定科目LWI（1年次）とGWI（2年次）を全生徒対象に実施することや、シンガポールへの海外修学旅行を行うことにより、主に実施してきた。それら事業の有意性は認められたものの、研究期間中の新たな教育課程の実施までには至らなかったが、平成31年度入学生より、教養教育（リベラルアーツ）を重要視した教育課程を導入する予定である。また、「SGHでつきたい力」を素地にしながら「本校でつきたい力」を整理しなおし、平成31年度学校経営目標に入れ込む形で、すべての教育課程に反映させ、カリキュラムマネジメントにつなげていくことを計画している。

### (2) 高大接続の状況について

県の教職5年経験者研修対象者や各教科の授業改善リーダーを中心に授業改善の取組が進んでおり、主体的で対話的な深い学びを目指した教育活動が進んでいる。教員の意識改革も進んでおり、知識偏重型から、学力の3要素を育成する教育へと徐々に変化している。前掲の平成31年度学校経営目標に挙げた「本校でつきたい力」は「学力の3要素」に基づいた構造となっており、SGH事業をとおして高大接続に対する理解が深まった結果といえる。

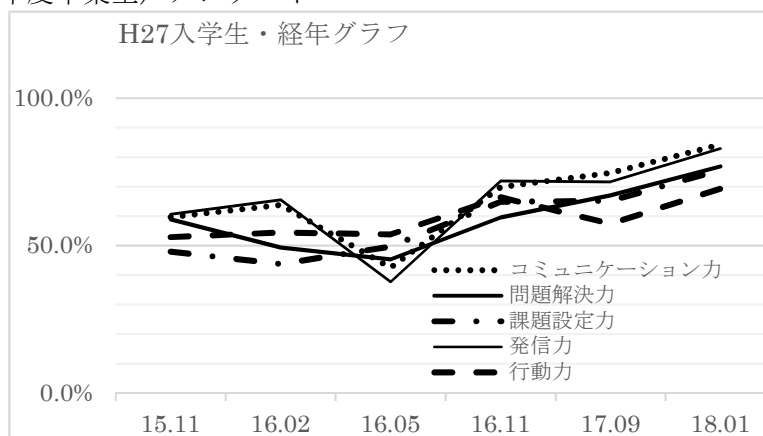
学力の三要素	対象世界との関係	他者との関係	自己との関係
知識・技能	広く深い教養	協働性	情報活用・解析能力
思考力・判断力・表現力等の能力	課題発見力	情報発信力	論理的構成力
主体性をもって 多様な人々と協働して学ぶ態度	批判的思考力 ⇒ 省察性	自己肯定感（主体性につながる資質） 挑戦する姿勢・粘り強さ	
生涯学習し続けることができる力 ⇒ 主体性			

### (3) 生徒の変化について

#### ア 平成27年度入学生（平成29年度卒業生）アンケート

平成27年度に入学し、平成29年度末に卒業した生徒を対象とした調査を、平成30年3学期及び平成30年10月期に実施した。

この学年は、SGHの学校設定科目LWIとGWIの授業を初めて受講し、課題研究に取り組んできたメンバーである。また高校入学試験の際、SGH事業で活躍することを希望した別枠で入学した生徒が10人いる。また、その枠の入学生ではなくても海外研修に参加した生徒もおり、様々な活動に果敢に挑戦した学年といえる。昨年度は3年生ということで、アンケートは大学受験直前の1月ではなく卒業式前日の2月28日にアンケートを実施した。その結果をそれまでのアンケート結果と比較したのが、右のグラフである。いずれのつけたい力も最も高い割合となっており、3年間の成果として肯定的にとらえた生徒が多いことがわかる。



平成30年10月に実施したアンケートは、卒業時にメールアドレスを登録した生徒に対し、グーグルフォームを利用して実施した。アンケート項目は、経年的に質問してきた項目を書き換え、SGHの課題研究で学んだことが、大学生活等でどのように役に立っているかを問う内容とした。メール送信対象が72人だったのに対し、回答は16人からしか戻らず、データが有意であるとは言えないが、総じて肯定的な回答が多い。中でも、「SGHの学習で身に付けた思考のプロセスを、大学の授業等で応用している」「(他校出身者と比較して) 周囲と協力して取り組む姿勢(協調性、リーダーシップ)」に対し半分の生徒が「非常にそう思う」と回答していることは、課題研究活動にチームで取り組んでいることに対する評価と理解したい。

肯定的な回答が9割を越えたアンケート項目は、「高校生のときに研究した水に関する課題が、その他の国際的・社会的・文化的課題と関係していることを実感した」「SGHの学習で身に付けた思考のプロセスを、大学の授業等で応用している」「身につけた考える力(洞察力、発想力、論理力)を活用している」の3項目である。

アンケートでは同時に、SGH事業のうち学校設定科目と海外研修が「SGHでつけたい力」を付けるのに役に立ったかを問う項目も設けた。その結果、LWI・GWIの授業につ

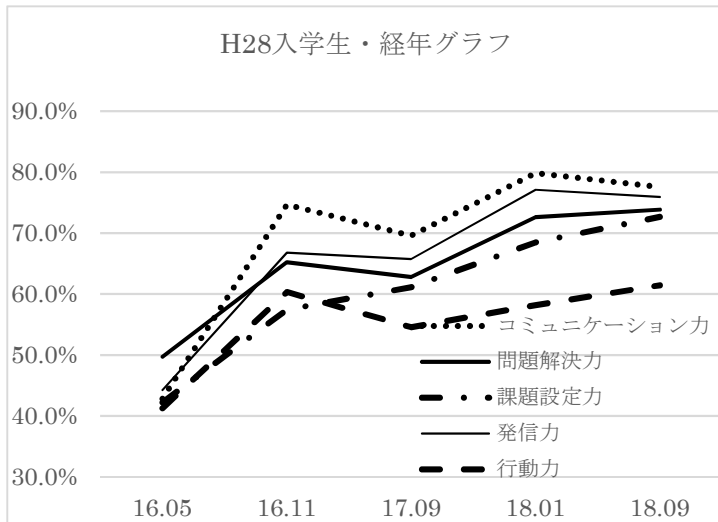
いて、肯定的な回答が9割を越えたアンケート項目は、「高校生

いては、本校のつきたい力を身に付けるのに役に立ったと回答している卒業生がほとんどであり、また「高校生の時に体験しておいてよかった」と感じている卒業生はLWIで100%。GWIも93.8%と非常に高い。海外研修についても、「高校生の時に体験しておいてよかった」の回答が多かった。

ただ前述のとおり、回答数が極めて少なかったことは課題であり、追跡調査の難しさの実感に加え、より良い実施方法を検討する必要があったと言える。

#### イ 平成28年度入学生の結果

1年次から改善を加え、前年度より環境の整った学校設定科目LWIとGWIの中で課題研究に取り組んできたこの学年の生徒には、海外研修などを通して積極的にSGH事業に取り組む生徒と同時に、従来の大学入試に向けた教科教育を重視する生徒もおり、課題研究やプレゼンテーションの捉え方に個人差が見られた。一方、全体の傾向を見ると、3年次9月に実施したアンケートでは、ほぼすべての項目で肯定的な回答が、これまでのアンケートの中で最も高い割合となった。



特に肯定的な回答が高かったのは、「地域課題に対して興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見るようになった」「社会問題に対して興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見るようになった」の2項目である。また「社会に貢献する活動や自分を高める活動に積極的に取り組みたい」という項目では、「非常にそう思う」と回答した生徒が40.7%に上ったほか、「高校卒業後、留学や海外への研修に行きたい」に肯定的

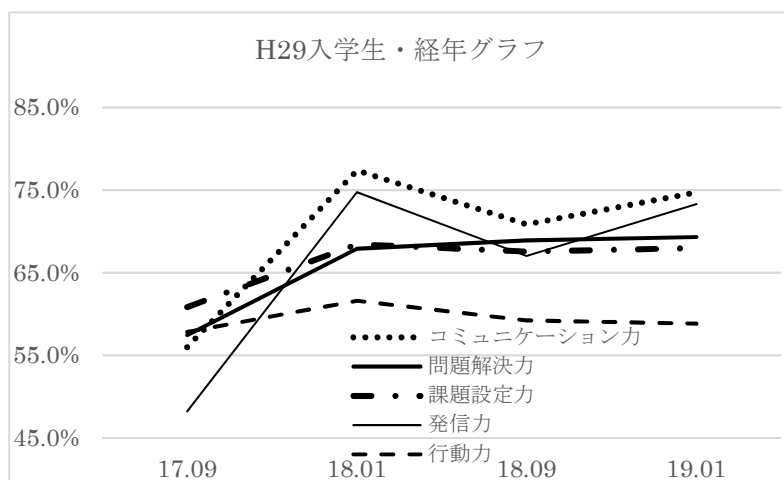
に回答した生徒も5割を超え、自ら学んできたことを行動に移していきたい意欲が高まったことが理解できる。

各項目を、本校のSGH事業で育てたい力である5つの「コミュニケーション力」「問題解決力」「課題設定力」「発信力」「行動力」に従って分析を行った。いずれの力も上下動はあるものの、入学時から着実に伸びているが、コミュニケーション力と発信力が2年次より落ち込んでいるのは、3年生になった時に何らかの発表の機会がなかったことによるものと思われる。

#### ウ 平成29年度入学生の結果

この学年が平成27・28年度入学生と大きく違うのは、課題研究活動に批判的な態度で臨む生徒がほとんどいなかったことである。それは本校の教員の意識の変容に加え、三島北高校では課題研究活動が必修となることに関する中学校側の理解が進んだ結果とも考えられる。また、平成27・28年度入学生は、2年次前期のデータが1年次と比較して低くなる傾向にあり、この学年の生徒も同様に、1年次よりも肯定的な回答の

割合が少なくなっている。しかし、その落ち込み方は緩やかで、「社会問題に対して興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見るようになった」「地域課題に対して興味や関心を持ち、ニュースや新聞を意識して見るようになった」「自分で設定した水に関する課題がその他の課題と関係していることがわかった」「SGHで身に付けた思考プロセスを他の場面でも応用するようになった」「課題解決をしていく上で、物事を多面的に見る姿勢が身に付いた」の各項目では、1年次よりも肯定的な回答割合が増えている。肯定的な回答の減少率が高い「日本語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた」「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた」の2項目については、GWIのシラバスで発表の機会を後期に集中して設定していることから、前期の段階ではあまり実感できないことに要因があったとも考えられ、後期のアンケート結果では、回復を見せている。



本校で育てたい5つの力で比較しても、例年通り1年次後期からの落ち込みは見られるが、問題解決力や課題設定力は微増となり、課題研究活動が、1年次のまとめから2年次の課題設定へとスムーズに移行できたことによるものと思われる。ただ後期になっても1年次後期ま

では回復せず、平成28年度入学生よりも若干低い数値で2年次を終了することになった。この要因は、GWIのシラバスが、10月以降探究を深める作業よりも、発表に重点が置かれたことが考えられる。2年次の課題研究は、平成31年度は情報の授業に、平成32年度以降は「総合的な探究の時間」に移行する予定だが、そのシラバス作成の際に反省を生かしていきたい。

## エ 平成30年度入学生の結果

多くのアンケート項目で、肯定的な回答の割合が増えており、特に後期は、コミュニケーション能力に関連した項目が大きな伸びを見せた。中でも、「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝える力が身に付いた」項目については、肯定的な回答が前期よりも2倍以上増加し、後期の英語プレゼンテーションに向けた取組が功を奏した結果となった。

また、アンケート結果を模擬試験の結果や論理的思考力テストと比較してみたところ、目立った相関は見られなかった。ただ、第1回アンケートで項目「高校在学中に留学や、海外への研修に行きたい」「高校卒業後、留学や海外への研修に行きたい」「将来、国際関係や英語を使う職業に就きたい」の項目に肯定的な回答をした生徒の方が、模擬試験での英語の偏差値は高く、英語や国際交流への興味・関心は、英語の成績向上につながる、という極めて順当な結果が見られた。

(4) 教師の変化について

教員自身の信念や実績についての質問項目は、OECD国際教員指導環境調査の質問項目を利用し、平成28年度から同じ内容で実施した。この3か年で比較すると、「教員としての私の役割は、生徒自身の探究を促すことだと思う」と回答した教員が95.7%を超したほか、「生徒は、問題に対する解決策を自ら見出すことで、最も効果的に学習すると思う」「生徒が学習の価値を見出せるよう手助けをしている」「生徒が理解できていないようなときには、別の説明の仕方を工夫している」の項目で、前年度より割合が高まっている。

記述項目では、SGH事業を通して、「生徒が他の授業で学んだことを自身の授業に関連付けたいという思いが強まった」「様々な課題が一つの課題に関わってきていることが意識されるようになった」といった教科横断型学習活動への心的姿勢の変化や、「対話や協働、発信といったプロセスを意識して授業を行うようになった」「生徒が主体的な学びができるような工夫を意識するようになった」「生徒の自主性や問題解決能力を尊重している」といった主体的・対話的で深い学びに取り組む姿勢に関する回答があった。SGH事業全体の目的には、高大接続の在り方に関する研究開発も含まれていたが、本校においては、高大接続改革の一端である高校教育改革に係り、教員の資質能力の向上が図られたものと判断することができる。

(5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

ア 保護者の意識

保護者へも、平成28年度から同じ項目について質問を行った。今年度は1年生保護者240人、2年生保護者157人、3年生保護者118人から回答をいただいた。全体としては、「本校でSGH事業に参加できたことは、お子さんにとって良かったと思う」に対する肯定的な回答が、減少していることが課題である。これは、SGH事業によって育った力を、保護者に示す機会が少なかったことに要因があると思われる。このことは、今回の調査では「わからない」という選択肢が加わり、その回答も1割弱あったことから推測できる。一方「お子さんはSGH事業を通じて、英語力や国際性が高まった」に対しては、肯定的な回答が、年次を経るに従い増加しており、効果を実感した方も増えたのではないかと考えられる。

「とてもそう思う」「そう思う」の 回答割合 ※（ ）は昨年度同集団の割合	1年生	2年生	3年生	(参)H29 3年生	(参)H28 3年生
お子さんは、SGH事業を通じて、地域や 社会の問題に対する興味・関心が高ま った	68.8%	65.6% (69.4%)	56.8% (62.8%)	68.4%	42.3%
お子さんは、SGH事業を通じて、英語力 や国際性が高まった	48.3%	49.7% (43.2%)	58.5% (50.4%)	61.0%	47.9%
本校でSGH事業に参加できたことは、 お子さんにとって良かったと思う。	84.6%	79.0% (88.6%)	78.0% (82.5%)	84.3%	67.6%

(6) 課題や問題点について

運営指導委員会等からは以前より、専門学科高校における課題研究と比較すると、研究内容が深まらないことが指摘されていた。理由としては、学年ごとに別チームとして授業の中で取り組むことから、同じ生徒が複数年度にわたって研究を進められないこと、先輩の研究を継続して実施できないことが挙げられる。平成28年度以降、前年度のレポート集作成により、研究内容の充実度は増してきたが、特にGWIにおいて、歴史的背景の理解などに研究の浅いところが散見された。

また中間評価の際に、3年次に課題研究に取り組めない教育課程の在り方が課題として指摘されたが、専門分野の指導力の限界や、生徒や保護者の四年制大学への進学意識の高さといった要因で、解決できないまま残ってしまった。

さらに、課題研究の最終発表の場を、プレゼンテーションではなくポスターセッションに設定したことから、英語で説明ができて受け答えまでは難しいという生徒も多く、英語の技能の中でも「やりとりする力」の伸長を図る指導の必要性が新たな課題として認識されるようになった。

(7) 今後の持続可能性について

ア 課題研究活動について

開発してきたシラバスを利用し、「総合的な学習（探究）の時間」において、課題研究活動を継続していく。専門家の支援が少なくなっても、教職員が対応できるようにするため、共通テーマをSDGsとする予定である。

イ 希望者対象海外研修

ベトナムへの海外研修は、ベトナムへの進出やベトナム人研修生の受入れに積極的な企業との連携を計画している。方法として「①年度当初に、ベトナムに現地法人や工場等を持つ日本企業が抱える課題について、海外研修に参加を希望する生徒が説明を受ける。②説明を受けた課題内容を、個々の生徒がSDGsの経済的な豊かさに係る目標と自然環境問題に係る目標双方の観点ですり合わせ、年間を通じた課題研究のテーマとする。③夏季休業中に、生徒がベトナムを訪問し、課題を提案した現地法人や工場等でフィールドワークを行う。④帰国後、探究活動を進め研究をまとめる。⑤年度末を目途に、課題を提案した企業に、研究成果をプレゼンテーションする」という流れを考えている。企業にはフィールドワークの旅費負担を依頼することで、双方が満足できる仕組みを構築し、まずは5年を目途に継続していきたいと考えている。

【担当者】

担当課	高校教育課	TEL	054-221-3165
氏名	河田 純次	FAX	054-251-8685
職名	教育主幹	e-mail	junjil_kawata@pref.shizuoka.lg.jp